風雅和歌集 上

特別
へ4
8099
17(3)

∧4
8099
17
(1)

< 2001-037 >

国立国会図書館

風雅和歌集序

夫和哥者気象元亨乾坤意想無窮宇宙渾沌未
剖其理自存人物既生其製遂著風雲草木之卦於
機感也寄興入雅具之端思慮萠動之数於景趣也一心
有訓諭之志於詠性情矣剖政教邪淫清之什去天子之
徳遥至人之風始被一朝浅者深之化已及三方信憑者掃之元申月詣二南之餘裕有平如
也近代諭人趣浮華不知和歌之實義倫以為好逑之媒
代之衰之於益好推以綺靡風刻為本寡古語雅
趣詞後飾而成之還暗于大本況以鄙俚庸俗直
述拙意不知風躰前在無以不足観者也淳風質朴情理

之本觀不擇此自暗於短度而擢取之者非述作之意開陳
巧辞華靡之為何以加神而幸於興味而為好之者失
雅正之躰之風宋儒高古難為含蓄之情包注歌精微易
入細砕之失動直則成粗張之氣婉艶之有憚約之病淪其躰
載不遑毛挙乃如文質半倫意匀共到者宜忘言得旨宣
假筆古盡平物而謂之不達其本源者乎滔波未流當
知淵深志於古風不干於歩於郊任者耶三代集以後得其
意者僅不過數輩其或有昇堂不入室況復年以来者數
息有餘焉故比頼風詢温元之故事適合風雅者歟集而
成編天下無二幸之言之故博采編訪自上古至当世集
録之命曰風雅和哥集惟推圖自推運數脱誰不為

祢仙松雖有日機法語詢既而得三滿多問眼前後煙
氛早收春馬徒逸老山之風雪并不動秋葉空抒草
野之露衆功已具庶績咸興雖行善忽蹉一物無與
所故唯民道久廢信源不會歸本今酒酣耐舞民撫化偏將華
詞葉深旨壯一時之觀專欲擧一隅雅什以遊遺千載
之美者干時貞和二年十二月九日慨之餘筆因記大經奈

やまとうたはおほつちいまさつかみのときよりいできにけり
そのこころをおもふにひとのよにあるときにあたりてことにつけ
ものにふれてみるきくわざしげきによりてなりけりしかあれば
はなにうぐひすをきかはかはづのこゑをきくにつけていきとしいけるもの
いづれかうたをよまざりける力をもいれずしてあめつちをうごかし
めのたけきもののふの心をもなぐさむるはうたなりさてもあめのしたに
うたをもてあそびこれをもてつたへをさめおこなひしこと
ひとりやまとのみにはかぎらざりけらしなかのくにには
ふみのこころをもてをさめ天竺には十二部の経
をわかちて三世の諸仏のさとりをひらき
ちからをもいれずして天地をうごかし
目に見えぬおにかみをもあはれと
おもはせ男女のなかをも
やはらげ猛きもののふの心をも慰むるは
歌なりけりかの六義のそのひとつにそへ
なをかつ十五の大風の
おさまれる御代のしるしにも
なりぬべきことわりなるべし

風雅和歌集巻第一

春歌上

前大納言為兼

春立ける日よめる

あら玉の年のうちに春はきにけりひとや
ことしをこぞとやいはむ

文治六年女房の
歌合に

皇太后宮大夫俊成

梅の花匂ふ軒端の月影に
なほ雪かをる夜半の春風

後法性寺入道前関白太政大臣

春の夜の夢のうき橋とだえして
峰に別るる横雲の空

摂政太政大臣

吉野山こぞの枝折の道かへて
まだ見ぬ方の花を尋ねむ

権大納言実氏

春日野は煙立つ見えて若草の
つまもこもれる春の山辺

入道前太政大臣

春来ぬと人はいへどもうぐひすの
なかぬ山里は音もせなくに

後京極摂政前太政大臣

春の夜の夢の浮橋とだえして
峰に別るる横雲の空

摂政太政大臣

吉野山こぞの枝折の道かへて
まだ見ぬ方の花を尋ねむ

権大納言実氏

春日野は煙立つ見えて若草の
つまもこもれる春の山辺

入道前太政大臣

春来ぬと人はいへどもうぐひすの
なかぬ山里は音もせなくに

源俊頼朝臣

皇太后宮大夫俊成

前大納言為家

宗澄法師

春日

第六元年四月廿三日

[illegible]

伏見院御歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春花ひらくと云ふこゝろを

賀之

雪の内ながらほころびそめにけり

もゝよ

むめが

ふりの雪ながらまだ咲くまでは

中納言家持

二月やよそにさきしき神のうへに梅の木ども

永福門院

百とせのそよりしら小雪

後宇多院乃御

梅の花

檜大納言公蔭

咲うめく春ぞ我ゝと知らせ雪のやうに白梅花

早春梅といふことを

今上御

雪ながら春をも知るか梅の花

遠村雪を

撒安門院

一むらの雪のそこ花白ひゞの

皇太后宮大夫俊成

春ぞ舞ひ

梅の花さそふ風こそ春乃雪

清輔乃家の屏風乃

貫之

春ごとにたゞ梅の花

中務乃

梅を

梅の花
ちるのちるなりまがふ雪の中に梅の花
題しらず　　お中納言定家
ちる花の風をうらみて帰るさの袂にあまる梅の香
前大納言為家
むめの花たちよりみてぞ帰りぬる春の夜ふかき月の影かな
お大納言尊氏
梅をうつす袖もうき香に匂ひきて春の夜ふかき月の影かな
進子内親王
水の面の梅のうき枝にうつろひて春の夜ふかき月の影かな
院沖斉

うす雪かかすみのうちの梅柳そのいろいろの春の景色
永福門院内侍
雪消ゆる谷の氷間なくて春の風吹く梅の初花
書記前中に
太上天皇
家なれば軒ばの梅もわすれねどそでうちかをる春の夜の月
和泉式部
みちもなき雪の下枝をたづねきて折る袖さえて梅の初花
梅の

風雅和琴集巻第二

春部中

百首御歌の中に

みよしのゝ雪の朝の

野べの柳

権大納言公蔭

春ごとにめもはる柳乱るゝは

雪ふる河の風のしわざか

院御歌

伏見院御

春ごとにめもはる柳ふくからに

元亨二年 御宇多院

お大納言為世

一かぢ吹く風よりさきもけさの春

柳をそむる初しぐれ

和国寺前内大臣家

雨もよし雪もよし柳のみどり

儀子内親王

吹そむる風柳さへ春ながら

百首の中に 権大納言公宗卿

たゝ浦柳いとゞ乱れて

若木柳を

春雨の糸をたゞ乱れ乱れ

末遠き若木の柳

お大納言為兼

庭潦の池水ながら六田川

玉の小柳を春ぞ来にける

法中定家

春の色の柳て屋そて春の色みえ
春は先つ緑柳すきて
永福門院内侍

雨そそく柳のすえのそこたえて
古集一句をとりて
出羽権守

こえのむこのむこの柳そよそよと
柳そよそよ
かりそめに白くそ春と春柳のいとみたれ
中務

春雨のいとみたれ
前中納言定家

春雨の糸乱れ
村雨

春雨の糸乱れ村雨
前大納言為兼

池水は花よりのちの春雨の
色そ深くなりまさる
従二位為子

あめ雨の山のみとりの空より色雨
花の散ぬる
権大納言為世

かすみこめ春のこすえの雨の色
春雨
前中納言定家

春雨に雲井の桜咲そめて
春風柳のいと乱れつつ

徽安門院
前大納言
永福門院
前大納言實明女
同院内侍
大納言
人丸
貫之
徽安門院一條

春御哥の中に　後二條院御哥

ひさかたのあまのかく山のすゑ霞よりやなきの志たに春風

永福門院

[illegible]

前大僧正慈鎮

春ふかき野への霞の下風にふかれてあかるゆふひはりかな

千首哥よミ侍りけるに　前大納言為家

帰る雁こしちはかすむ雲のみちはゆくへもしらぬあけほのゝ空

春のうたとて　従二位家隆

かへる鴈秋こしかすはしらねとも寝覚の空に声きこゆなり

海霞を　藤原為秀朝臣

まつら人あさ霞行てふ春の雁あはれなるへきみなかたの声

永福門院

入かたの月は霞の底にふけてかへりおくるゝ雁の一つら

康資王母

かりかねの花のあたりを過ゆくは人さへあかすおもひしらるゝ

春日社によミてたてまつりける百首哥の中に　皇太后宮大夫俊成

なかなかに花をさそひて霞ぬる風はかりにも人はまたれけれと

題しらす　西行法師

春ふかみ枝の桜の枝ことにちる花さへも春をしらすや
いまさらに春をわするゝ花もあらし

後鳥羽院

めくる世に春逢ふ比もおほかれとさく桜のいろそまされる
花ハわかおもふにかハらさりけり

鴨長明

山桜やよひなかはになりぬれハみな花の都なりけり

前関白太政大臣

なかむれハ錦とそ見るのこりおほき花そなハさくら春の山もと

春夜中　朔平門院

さきぬれハ木すゑの花をとふ人もさくら風にいさよふけさのはる

花乃寺とて　永福門院右衛門督

みよしのの花ハ咲ぬる春ことにわか春風をまちわひしけり

伏見院西園寺に御幸ありて花乃ころ人々まうけせさせ給ひける時　前大納言為兼

宿ゝやさこのふもいつくそ世にしられみなもちる桜花
花しら須とりそへて人ゑらをも
うらやましき春はさこそぬれてもまたぬとりの精の春みれい

人麿

見わたせハ春日ハ野へに霞たちさきにほへるハ桜花かも
萬の木はふ春のうけあへいのちハ花のたえてまけれ
桜を　中納言家持

春雨のふるにつけても我宿のはつの花ハ咲かたになり

寶治百首中に見花　後鳥羽院下野

もと

延元年十六年 前関白

百首哥中に　太上天皇

かはりゆくかゝみのかけをなけきても春にしられぬ桜なりけり

春哥とて　前左大臣

長閑なるくもゐの春にめくりきて春の盛をみるそうれしき

法橋顕昭

絶ぬへき年のなかさの人の身にひとりみさらん山桜かな

祝部成茂

此ゝ毎なかめぬ春はなけれともあかぬは花の色にそありける

嘉陽門院

ゆきはけにつもりもはてぬ庭の花かせにまかせてちるなりけり

寛治七年三月十日法勝寺の花御覧しけるついてに

ては常よりも花のおもしろくさかりなりけれは

京極前関白太政大臣のもとへつかはさせ給ひけるとて

ぬとてまいらせけれはよろこひ参りけるに

白河院御製

山桜ちらてまちけるかひありてけふこそ花のさかりなりけれ

高倉院御時内裏より女房あまたいさなひて

上達部殿上人あまた参りて右京大夫なとも

風の音ありてとくちらしけれは花の枝を

折てつかはしける　小侍従

ゆきそへぬ花の色はけさとひくるひとにみせまほしきは

むかし　建礼門院右京大夫

[illegible]

源道海

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風雅和歌集巻第三

春歌下

花園院に御幸ありて翫花といふ題を講せられ
侍りける時　後伏見院御製

萬代のためし白河にさかりなる花の陰ならましを

花の御前にて　崇光院御哥

今日ぞ見むかつ見ぬ花の春こそは花深くて心あり
ける

花もさぞうれしとひさしく待ちし今日の日影に
けり　後光明照院前関白左大臣

けふこそは散らで咲く花を思ひなれしの花の色
花の所に　従二位隆教

あかずのみあかで花の色ひとへに紀世の春はあかぬ

三月のころ花を年々に　修理大夫顕季

常よりも見るもあかず花の陰に春をくらせば日のあかぬ

千五百番歌合に　前大僧正慈鎮

春の花なれとも世にとゞまらず桜の色も思ひあかぬ

惜花といふことを　後西園寺入道前太政大臣

散る花は春とて見えずうつろへば花も我世に惜しまれぬや

持明院殿にて三月十日頃行て花の本に花をあかず

見て花を見はてゝ志る花の色に花さかりの枝

読みて　伏見院御哥

権中納言定頼

雨うちそそぐ春の山里

源中将兼資

おぼつかなたれかは問はん春の雨に

小弁

山家花といふことを

よそにのみ花をもとめて山里の

屏風の絵に梅の木に

花山院御製

梅の花ありとも知らず我宿の

中納言家持

訪ふ人もなき春の山里

二條院讃岐

春の夜の夢の浮橋とだえして

峰に別るる横雲の空

藤原敦光朝臣

浪の音松の響も静かにて

入相の鐘に明くる春の夜

前中納言匡房

花の雪あとなきまでにふりつもる
　　落もをしまぬ心なりけり　　従二位為子

吹きうつす雪の花ゆゑ山里の
　　なべて木ずゑも春めきにけり　　従二位親子

春雨の音のみしきて暮ぬれば
　　庭の雪間も見えぬ頃かな　　従二位宣子

白雲の重なる山のうすみどり
　　百重に霞む春の曙　　大納言経任

降つもる雪の下折も知られけり
　　通ふ小鳥の跡のまばらに　　従二位為子

春ごとに花の雪ふる山里は
　　ちる花ばかりむもれやはする　　従二位宣子

寛治百首に詠ける　　左京大夫顕輔

安部の淡雪
花下
ちるものの心ぞうき春の暮
前大納言教長
百首の内
春とそはたなく梅を惜らん
春ふかみ
権三位親子
すみれ咲道乃芝生もまたれけり
散のこる花もありすき山ざくら
永福門院内侍
困庭落花
中納言清雅

ゆく春の名ごりの庭をはらふ哉
花下
吹すさむ風にまかせて池水の
百首の中に 院御所
三井寺へ春をおしむの人々と
三井寺の花のとなりの山ざくら
すみ染の衣かへうき夕ぐれに
前大納言公任
老前春といへる心を
春ふかみ花もそ老のしるしなる
皇太后宮大夫俊成

大納言為兼

花ゆゑに
袖のみぬるる
春雨ぞふる

大納言為家

おもふこと
なきだにものは
かなしきを

従二位頼政

ゆふされば
あやめもわかぬ
軒のつまかな

法橋行遍

大納言経信

駒とめて
なほ水かげの
かきつばた

前中納言匡房

夏山に
ほととぎすの
一こゑを

道因法師

ほととぎす
なくや五月の
あやめ草

百首御歌に
院御歌
[illegible]
[illegible]
[illegible]

中務

大神文へさてまつりける

皇太神宮大宮使俊成

春沸寺の中に

後冷泉院の御

百首奉りける時

大納言公重

順徳院御

辛夷坂寺会

藤原興風

春ごとに咲寺ぞ咲ける山の名の
かすみわたりて咲ける山の名の
三輪河白波

お大僧正慈源

伏見後神前

朝夕に咲ける花の名の
花の名の
吹風も香ぞ

前大僧正覚圓

後朱雀院

春の花ぞ
春の神前に
散るを見ても
百首歌たてまつりける時

永縁八首

谷川流れ

[illegible] 前大納言真時卿
[illegible] 進源卿端とうたる
[illegible]
[illegible]
[illegible] お大僧正慈鎮
[illegible]
[illegible] 従儀同三司
[illegible]
[illegible]
[illegible] お大納言為兼
[illegible]
百首哥中に
太上天皇

[illegible]
[illegible]
[illegible]

夏哥

後鳥羽院御製

時鳥なかすみわたれる空なれや
はるかに松の大江
ほとゝぎす
春雨のふるさとまでもきこゆなり
前大納言為家
ほとゝぎすなくやさつきのあやめ草
ひくてもたえぬ五月雨の頃
寶治百首哥の中に郭公
なつをへていくこゑきゝてほとゝぎす
なほあかなくにまたぬ夜ぞなき
寶治二年後久月百首哥の中

時鳥なくや五月のあやめ草
あかぬねをたれにかたらん
三月盡のこゝろ
春ゆくとたれにつげやらん
なくこゑもなき山ほとゝぎす
皇太后宮大夫俊成
ほとゝぎすなくこゑきけばあかつきの
ねざめぞ人のかぎりなりける

同
式子内親王
桜花乃ちりのまかひにまよふ春の夜の嵐のさそふ(?)

百首御哥中に寒夜を
後二条院御哥
さくら花家々(?)にまかひ(?)あらは(?)ちるとみえて雪(?)ふる(?)
雪(?)月のよ(?)に(?)絶(?)にしをりにける(?)

院御哥
花乃(?)春をとゝめすなけくなる(?)山をすき(?)山郭公

後鳥羽院よませ給ける五十首哥の中に
後二位家隆
かきねまてうつろふ(?)まつに我宿の池乃藤波うちよするかな

千五百番哥合に　前中納言定家
時しらぬ里は玉川いつとてか夏乃かきねをうつむしら雪

前大納言兼宗家哥合に卯花を
前大納言経房
あさ渡る卯花山をみわたせは空はさなから(?)つゝむ白雲
越る白浪

前大納言為兼
夏あさきみとりの木立庭とほみ雨ふりやみて日影しつけき

夏朝といふことを　権大納言公宗
うき雲のわかるゝ山の朝あけにほのかに残る雨のなこり也

夏哥中　後一条入道前関白左大臣
たちはなのにほふ二葉のこすゑ(?)に(?)いくよ(?)かなれ(?)しみえ(?)つゝき

院ノ三年前ニ始メテ奏

藤原清輔朝臣
源三位頼政
待賢門院堀河
お中納言宗家
源三位頼政
前大納言忠良
前大納言経継
お大納言経親
左近中将忠季
お大納言公泰

後中書王

かきくらし雪ふるさとの冬の夜は
　　月見るこゝろなしにやはある

寛元二年三月廿日

後嵯峨院御歌

あをやぎのいとみだれなむ春風に
　　ほころびそめし花のにしきを

寛元二年三月廿日

正二位隆教

ふきとけよ春の柳のいとすゝし
　　みなそこ清き夏の夕風

寛元二年三月廿日

源後平

おもかげをうつすみなそこの月をさへ
　　波のうへにてくだくかぜかな

寛元二年三月廿日

藤原清輔朝臣

夜もすがらたゞ浪のみかよふ風ぞふく
　　河原の月をあらふなるべし

寛元二年三月廿日

無品親王

波ぢかくうつりてすめる月かげを
　　袖にもかけてあらふ浦風

寛元二年三月廿日

法印定為

月前暁雪

ふりつもるあさぢが露をそのまゝに
　　雪にうつしてをける山里

寛元二年三月廿日

後京極摂政前太政大臣

ながめつゝ思ふもものゝあはれなり
　　我のみ秋の夜はかはらじ

寛元二年三月廿日

二条法親王兼覚

夏行は中に
春秋を志すそを水鏡の月のまとみる
都芳門院大藏
松のこの月のすゑをみて
祝子内親王
夏をそ水の雲の新みて
あまりあふ夏乃すゑを
前関白太政
夏行は中に
夏を待時
うそ鶯き新緑
後京極摂政前太政大臣
月のそすゑれ月乃そ遥
従三位藤原秋
端ちかうたゝのそ涼
秋を夏月乃新
山みねのまとをとをさ
伏見院新宰相
夏をそ月乃新を
お大僧正道意
ふのまゝ木のまゝ月乃新を
後京極摂政前
水上夏月を
夜のふけ行き活水月新
夏は夜月乃そ
賀茂重保
後京極摂政太政大臣

淡路三年忌(千)
お太宰大弐俊邑
松の下葉の枯てをかきて
ありよとも思ひのこして
夜前女中に
百首沖ノ井女中に
夜前
元亀二年淡路勾当
夜前
月の秋雲物のこる夜
ほのぼのと
後朝
夏野とふこと
今上御前
桜を
進子内親王
二条院讃岐
世の恋の恋風

夏月

むすまでに月に幾度つゆの玉
降似若とふことの絶

大納言通方

松ふく風をすきて山の井の底のさ浪も
夜乃至中に

依思法師

なく蛙こゑきゝ末すゑの世の新枕ちかく
元盛二〇復宮内卿

檜中納言雅

みそぎする河瀬の浪もたちかへり
六月祓を

順徳院御歌

潯川夜半に誰てなるゝとはなしに
六月祓をや

法橋宗円

河波をみそぎの浪のたちかへり

秋歌上

後京極摂政前太政大臣

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

寛治二年百首歌奉

早稲

源俊頼朝臣

ふるさとの秋の風とや稲葉そよぎ露の玉ゆく小田の夕暮

前中納言定家

秋ふかき色とも見えぬ夕暮に風の音こそ身にしみにけれ

藤原顕仲朝臣

正二位俊成

ふるさとの秋の夕暮来てみれば門田の稲葉おとづれにけり

秋歌とて

入道二品親王法守

わが袖に稲葉一葉のそよぎきてうらめづらしき秋の初風

権大納言公宗

久堅の雲のかよひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

中宮大夫師平

秋風の吹きにし日よりわが宿の萩の下葉ぞ色づきにける

お大納言公蔭

権大納言公蔭

秋ふかき色とも見えぬ夕暮に風の音こそ身にしみにけれ

寛治二年百首歌奉

百首歌の中に野外花を

おほ江こぬ春の柳の糸ゆゑに
　波にうつりて色まさるなり

秋ふかき庭も尚ある花ざかり
　かな

　　おほ江清満雅方

夏ごろもかさねてうすき袖の上に
　幸ある波のしらゆふの露

　　後柏原院

あさ妻の琴未ひく姫ごもり
　風こそ通へ庭の松が枝

　　永福門院

さゝなみや志賀の都のふる柳
　姫君寺の中にみどりの

　　秋仁

　　安部の清澄

花をうつす
風吹けば松をも越ゆる雪のうち
　鳥元三年仙宮の春

　　お中納言宗教

志賀の里ふる松風の音ばかり
　むかしを残す秋の夕暮

　　藤原貞朝臣母

ふく風もあらぬ松陰ふりつもる
　雪の白髪をうちはらふらし

正三位季経

お中納言定家

伏見院御所

前大納言為兼

入道二品親王法守

お大宰大弐俊兼

藤原重尹

如教法師

もゝそ
もゝそ川ゆきめぐりあふ秋の日のかげとゝもにうつろふ色は
　　從二位家隆
秋風のふきあげにたつしら雲はをちの高嶺の花の名残か
　　僧慶法師
雲のゐる遠山松にかぜすぎてをのへにかゝるさをしかの聲
　　前大僧正覺忠
秋ふかみ露ふきむすぶ風のおとに夢もさだめぬ荻の上葉哉
　　院御製
ながめやる袖の露さへ色ふかき秋の夕の山のはの月
　　從二位家隆
秋風のふきあげにたつしら雲はをちの高嶺の花の名残か
　　僧慶法師
雲のゐる遠山松にかぜすぎてをのへにかゝるさをしかの聲
　　前大僧正覺忠
秋ふかみ露ふきむすぶ風のおとに夢もさだめぬ荻の上葉哉
　　院御製
ながめやる袖の露さへ色ふかき秋の夕の山のはの月
　　從二位家隆

永福門院
秋風のふきそめしより秋の野の千草の花ぞ色まさりける
　　前大納言為兼
夜をこめて鳥のそら音はかるとも世に逢坂の關はゆるさじ
　　僧正法師
伏見院御時
逢坂の關の清水にかげ見えていまや引らむ望月の駒
　　太上天皇
かゝまくもあやに恐し住吉の岸の姫松幾代へぬらむ
　　前大納言為世
おく露に玉ゐる萩を朝ごとに分つゝ行けば袖ぞぬれぬる
　　從二位家隆

儀子内親王

橘為仲朝臣

藤原為秀朝臣

徽安門院

前大僧正覚恵

大納言泰通

風雅和歌集巻第六

冬歌中

初鴈をよめる

大納言経信

たつた山もみぢを幣とたむけつつ
いのるしるしは神ぞしるらん

後朱雀院の御時内裏の歌合し侍りけるに

後拾遺

雁をよめる

源経相

吹きわたる風の音にぞおどろかれ
夜半の雁がねうちつれてなり

題しらず

藤原基俊

雁がねの鳴きて渡るみ空の雲
いかばかりなる風か吹くらん

題しらず

大僧正道玄

この夕べ物思ふ袖を吹きて

野宮次
[illegible]
百官等初
[illegible]
伏見院二十首
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雲さとる今の新ら松
姫子そ
かりそめとおもひし小笹
今日六十年

徽安門院

名にしおふ柳のすゑの
お大納言の局

秋風のうき夕ことに
大江宗秀

露ふかき
永福門院内侍

庭のおもの
二条院讃岐

秋風のうき夕ことに
露ふかき庭のおもの

伏見院御歌

萩のうへ露の玉ちる
百首歌たてまつりし
時

徽安門院一条

あさの袖の袖の
和泉式部

月ならぬ秋
百首歌たてまつりし
時

徽安門院

萩のうへ露の玉ちる
百首歌たてまつりし
時

徽安門院一条

忘ちるき袖のうへや
秋ふかき

徽安門院

あさの袖の袖の
賀茂保憲女

月ならぬ秋
百首歌たてまつりし
時

和泉式部

百ヶ寺ヨリ時
[illegible]
枝大納言云云
枝ヲテ
[illegible]
[illegible]
後伏見法皇
後伏見法皇時ニ枝ヲ
枝ヲテ
[illegible]
[illegible]
元亨二年四月廿日寺
[illegible]
今出川大臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]

百貫欵ヨリ内
[illegible]
[illegible]
[illegible]

伏見宮貞敦親王
吹きそふる秋のあらしの音とめて庭の紅葉
祝子内親王
ふるの神杉の木ずえに雪つきて秋風の吉
お大納言経房
海ちかき月ぞもりもりもりもりもりもりもり
徽安門院
くもりなき宝のおもてもりもりもりもりもり
冥白右大臣

前大納言為家卿
月のかげやどせる水のそこみえてもりもりもりもりもり
百首歌奉りし時
後深草院
春あさき池水氷とけそめて花風
月前花
娟子内親王
山ざとは雪とともにや消えぬらむ木の下水
前大納言為氏
花ちりし庭をうづめる雪の上に春の木ずえ
藤原定家朝臣
八月十五夜侍臣ども召して月の歌よ

月前雪

村雪と紀行の葉ずりうち交り
月ぬき給ひ
月のみ晴まのみそらにくもりなき秋の海をも
さしつゝ雪ぞ小舟こぐ新
平宗宣朝臣

村雪とかゝれば月の晴もりぬる秋をぞ
吹ふかぬ風こそ紀行の葉ずりの月ぬき給ひ
永福門院

月前雪

村風も雪ぞ小舟こぐ新
お大納言為兼卿

月前雪

みるまの玉ぬきつゝ雪ぞ
月ぬき給ひ
永福門院

月前雪

雪ぬき給ひ月のみ晴もりぬる秋をぞ
百首歌奉りし時
民部卿為定

秋夕

月ゆえのひかりをさやけき秋てふやあくがれて三首寄懐せしうた

元国寺前内大臣女

同梅月

ありあけの月にそ秋の山もとは

後西院御製

むら雲のこなたかなたの秋そうき

お中納言季雄

大虚吹ふく風ともあらそひて秋の野

中納言為村

山里はかりの秋の秋風

山里はかりの秋けふふくらし

選子内親王家中務

秋のくるあくるもあくるものこゝろ

秋のくるあくるもあくるものこゝろ

伏見院御製

山風も身にしむ秋のゆふくれ

永福門院

秋風にたなひく雲のたえまより

月もやすらふ峯のかけはし

百首寄時

宣光門院新大納言

秋ふかき庭の小萩のうらみても

なをたのめとや露のこぼるゝ

百首寄井

堀河院御製

むら雨の露もまたひぬ槙の葉に

霧たちのぼる秋の夕暮

堀河院大納言

野寄

弾正少弼菅原朝臣

百首哥たてまつりし時

松風

大江廣秀

前大宰大貳俊兼

左近中将忠季

元亨二年後宇多院

百首哥たてまつりし時

松風

前大納言為兼

後西園寺入道前太政大臣

松帝納言後實

藤原朝臣

お大納言為兼

お中納言法雅

春をへて田面のかりみちこふるの雁もいつしかもとり
今年三年前二年めぐりきてつゐに秋の
永行のめぐりの里を禁りて秋をしる事を
今上御宇
名ばかりの関の杜をも越
建長三年吹田に十首
三年也行
後深草院の歌

二条院御製
紅葉
秋のくれゆくそらをこの一
伏見院御製
一枝をたれてうつる人の
二条院御製
秋
ことの神さびたる
秋田

なる月の比ほひ
おくれ給へりしのお菓子
おくりあり
紙宣朝臣
九月九日
重陽宴
ありしかば
山階へ遣はす
なる月菊のうつろひたるを
九重にかざしつるかひありと
おもひいでらるるころ
冷泉前大納言
九重に
かざしつるかひ
ありそうも
菊見ん
友京隆朝臣
九月九日
おくりあり
仰の沙時三首
詠せよ
とありしかば
菊
源光行
百敷やふるき軒端の忍草
いかに
しのべば
露の玉
ゆらぬ
ものから
菊
法眼朝隆
九重に
かざしつるかひ
ありそうも
菊見ん
源光行
百敷やふるき軒端の忍草
いかにしのべば
露の玉
ゆらぬ
ものから
菊
お中納言師時
露をだに
いとふ
袖の
菊見ん
貫之

そく彩のうめもとせんまいの三六番通
杜前に　お中納言宗家
降りかゝる雨さへ珍しき杜かな　進子内親王
みそさゝい藤こきまぜし杜の風　前中納言通房
初雪こゝろせし菓子きりくと杜と書めやきり　紫宸院うめもと
霜草敷指法思若とうらん式　お茶の教教長

ほと出てくるひと時ゝ前杜絵そやなぎめ
杜の沸前九州にて　後乃木院の前
高ちき杜木葉を吹そそぐれの山下風のそ
院也前前合の杜視雄とうふ式
燈夜のきこり杜吉小家女　檀大納言宗女
苔杜夜と
庭の白ゝ雪のうすく積りたる夜　お大僧正実英
降ゝ三年前雪めきれ時杜本と
杜の夜ゝ雪のまてもつる相の風いとすゝりのそさゝ引

永福寺

冬歌

十月一日亭子院にてこれを講ぜられて

前大納言公任

松ならぬ紅葉をみてぞ知りにける
木枯といふ嵐ふく日は

参議雅経

冬ながら春の心地こそすれ
雪ふれば木毎に花ぞ咲きにける
いづれを雪と分てましかば

藤原俊成

初冬の心を

従二位家隆

吹はらふ嵐の末に時雨つつ
もみぢ葉ふかき山の夕暮

年ふかみ

山ぢこそなけれ

寂蓮法師

お中納言為家

小柴の為ぢとわたりてふる雪に
月をも花をもよそにこそ思へ

従二位俊成卿

後光厳院入道太政大臣
時勝
名乃をあり衆うとて時勝とて座すみて海老の新
心えうえ仁ゆ七の一とて時勝より綸旨日新さ時勝よりうり
あり寸ま時勝の宅れうえ仁ゆ七にみて分の新そ
元亀百七年ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
志うふとふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
太上天皇
儀子内親王
従三位藤秋
民部卿力定

お中納言為相
時勝ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
依位従四位為元合ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
第大納言家雅
うえくゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
時勝ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
志うふとふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
おとふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
教長
志うふとふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
進子内親王
心あうえ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七
後鳥羽院御所
神元月ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七ふ仁ゆ七

永福門院

伏見院新筆相
百首歌合に寄雲時
雲

権大納言公蔭

春日詣長歌の中に
春日仲朝臣

永陽門院右京大夫

大中臣頼基朝臣

権二位局

永福門院

進子内親王

落葉添えて

伏見宮貞成親王

源太皇太后宮下野

貫之

順

弘長二年落葉和歌十首

河落葉

後嵯峨院御歌

後二條院御歌

院無清緒

あひそもそも成んぬる
千鳥とこそ
ひさしくも
寶治百首
名誉の三首
海をこそ
さそふ沖の
寒き

永福門院

百首歌奉りし時　民部卿為定

とけそむる岡の緑もみえそめて春のあはゆきなをのこる霞

題しらす　章義門院

なかれゆくその柳かえたさへひく雪さ川辺の蕾そまけさき

藤原為基朝臣

浮雲も時雨くらしてかへるなは雪ふりぬれの山の夕暮

雪歌中に　道全太上大臣

ふりはれて晴ゆく嵐にてゆつきたまよ雪深くなり

建仁元年三月哥合に雪似白雲といふ事を

後鳥羽院御哥

雪やらぬ空にて峰さえ風にかせてつもる雲の数かさなる

寒窓前聞新雪といふ事を

前中納言定家

初雪の窓のくれ竹ふしなからおもる上葉のほとそきこゆる

題しらす　前中納言雅孝

ふりけりも吉野のさとはみえまさて落葉もしろき庭のしら雪

道全法師　余イ　金九

庭にてる霜とみえしは置のふの松の葉しろき朝の雪

藤原朝定

河風の森の入江は降埋み跡も道もしられぬ野への白雪

従冷泉

跡もなくふりぬるしらに源に冷ささ生るまの野への夕雪

初日新しや元日ふじの雪　　春恵法師

冬ごもり
いけるとも
野雪とも

行路雪

右近大将通嗣

四大臣

友平雪

藤原重孝

旅人のさえ行かあまた
左兵衛督直義家の会

波うつ
雪より
風ぬきて

前大納言為兼

ゆき
松雪の

詩会右大臣

琴後

深山
雪の中に

山家雪

元亨二年二月廿三日

民部卿為定

そのやうしき朝のさ
程をもひそめ
えりまき腰あ
花
乃雪ふうき
島かへ
うをは
院一條
徹あ門院
後島羽法皇
儀子内親王
前大僧正覚
吹かへすうらもく成
百首うち
うら葉未に
をうす
院一條
ふとの竹
今出川
乃至花山
夕雪

降きふ夕雪の
竹の葉うき朝乃月
夜永親行朝臣
お中納言重資
雪ふて雪ふる
院一條
まれく焼もさも雪の
左兵衛督直義
雪のうちに梅さひき雪の村
伏見院御

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後朱雀院
正應二年十月廿六日
[illegible]
[illegible]
[illegible]

前大納言為家

為家卿二条院讃岐をめしおかれけるころ
院の御所にて
ふるさとの宮ばらのあれ行くをみてもなほ
忘れやらぬ昔なりけり

お大納言為世

為世卿
その比御所にて焼のこりたる書
どもを御覧ぜられけるついでに
仮名にてそまりの歌を詠ぜられ
ける

お中納言雅孝

雅孝卿すゞ鹿のうへの歌
ながらへてすゞ鹿の
すむかぎりかな

権大納言為定

為定卿
遠筑紫にて
すむかぎりの煙とも
なりにしを
なほ都にと
思ふ心は

平貞時朝臣

貞時
冬ごもりおもふ心は
冬ごもりおもふ心は
日吉社へ
院沖奇

皇太后宮大夫俊成

うつゝ夢

寛治元年十一月十九日
當座和歌
　　正三位匡房
雪ふりてなをふかきよのつきかげは
　　人のこゝろのあきやしるらん

　　秋歌
人の馬をもとめて侍りけるに遣はしける
　　源俊頼朝臣
秋風に草木のなびくをりしもあれ
　　君が心のあきをしるかな
返し
　　源経信卿
草木だにおのがなびかむ時をこそ
　　人の心のあきをしるらめ
寛治五年
　　関白前太政大臣
なにはえのあしのかりねの一よゆゑ
　　みをつくしてもたのまるゝかな

文権の
院沙汰
を奪い主人安堵すべき有のまゝの権
限行い給うべき旨達せ給う権中良家
許つかまつる
事未つゝ心之庭ま林葉そこゝろ安のおそなさ
山を
近江国沙汰大納言
ふうこゝ沙汰ま給けるゆゑ沙汰あまつ
年前ゝ給うる様
めふけく業あとゝうふ
権中
お大納言為兼
卿
京注記を慈道

ゆゑ私のとまりやもつ成めん私のあれこし権ゝ処
寛治二年二百ゝ許めつゝ私ゝ権ゝ
一もの里ゝ
行業ゝ庭ゝ書ゝ里の大ゝもゝ夢ゝ書ゝ
冬書面ゝ
権月ゝ
ゝ
従三位行能
和気仲成朝臣
お如法経
従二位為子
平維貞

川と海の草の枝の露にちとせまつらん秋の庭と月舟

九月十三夜ハ河ら志海へまいりしに徳得のよみし

歌わりて後の月と申し侍りける

藤原公重朝臣

あきの夜の月はこよひそなかつきのあつらへかけの枝もせ

光也

従三位基輔

秋の夜もさやけき月の桂てらすも神代の空の末

藤原頼氏

ときりは秋のなかはの空にとも見えゆく月そ

藤原公重朝臣

秋の夜にあつく桜の庭とりをさやけきみし月を

霧中嵐を

あ家成信言

吹おろす嵐の山のこのは朝霧の神さひてふりかかる

あけかたの月の嵐の山のすゑとそみる

前大納言為兼

嵐と川といそくなかれの緒ふかくつきの瀬のとよみ

さやの中山まで

秋の雨のはれゆくかけの嵐きよくかさやか中山

前大納言入道為兼

椎の葉とて

山の雲のさや中山みえてのちの夢かもとや

あつまへまかりけるの道にて見ゆる

前大納言為兼

[illegible]
[illegible]
[illegible]

戀歌一

題しらず　　権大納言公蔭

奥ありそ浪よりほかにわれぬれて
　百重ぞそでにかくる時なき

　　開白右大臣

たえまなき神の御垣の玉ぐしに
　おのが教長

　　後醍醐院御歌

我恋をしるものもがな天つ空
　通ふ心の道したどりて

初恋の心を

　前中納言定家

昨日見てけふこえそめし逢坂の
　恋路とおもへ関もすゑなく

　今上御歌

拘りて我こそ来つれ逢坂の
　関こえぬ人もあらじとぞ思ふ

　権大納言公蔭

人をおもふこころもありひえの山
　恋しきものと知らずやあらん

　後三條院御子

はるばると海ぶきわたる風の音を
　枕にしてもきくよしもがな

大貳三位

忘斎と
号す上人名をたせめ
文保三年後宇
法華三昧堂
つまるりけり
よりて
ゆきとゞきこうを受
忘斎に
志すものいつもの
順徳院御

永福門院
為兼卿母
女二条院
進子内親王
徽安門院一条
永福門院右衛門督
為定卿